

第2回 斐伊川放水路環境モニタリング協議会 (議事要旨)

開催日時：平成28年1月13日(水) 13:00～16:30

場 所：出雲河川事務所

議事要旨：

1. H26～H27年モニタリング調査結果の概要

- ・資料-1.1、資料-1.2、資料-1.3について、事務局から説明を行い、以下の質疑及び助言がなされた。
- ・(委員)過去、神戸川ではシジミの調査が実施されていないので、今回の調査結果は貴重な資料となる。禁漁区と漁区で分けて調査しているが、本来なら禁漁区が増えるはずだが少し減っている。禁漁区の設定はどう行われているのか。
→禁漁区については、1.9 kmの新崎屋橋を境目に毎年禁漁区が入れ変わっている。
- ・(委員)鳥類の確認種リストに示された確認地点がどこなのか教えて欲しい。平成26, 27年だけに確認された地点に注目した方がいいと思う。また、資料にウツセミカジカと記載、整理されているが、こういった種名で採用するかは相談したい。
→個別にご相談させていただきたい。
- ・(委員)アユについての一番の問題は、神戸堰湛水部に仔アユが滞留し、降下できていないのではないかという点であると考え。このため、堰の倒伏により水を流すという試みは良い事であると考え。また、調査結果から堰下流部での産卵の可能性が示唆されているが、以前は堰下流に瀬があって産卵していた。現在は、潮が入ってあまり期待できない。アーチ状の落差工とその下流部の州の間は潮の影響を受けにくく、瀬の環境が残っているため、産卵している可能性がある。親魚も堰下流にたまっていることもある。このため、砂が溜まらないよう中央に水を集めて瀬をつくり産卵場として整備するのも良いのではないか。
→河川管理者として対応できる範囲はあるが、環境への配慮という中で、可能なものについては検討したい。

- ・(委員) AW8でヒメガマ群落の面積の割合が多くなっているが、ヒメガマは水深が数十センチぐらいの浅めの水位では割と早く分布を広げる。これはP8のワンド物理環境の調査結果で、他のワンドに比べて平均水深が浅くなっており、環境を反映している結果だと考える。AW8は、「大型水鳥等に配慮した環境」を目的にワンドを整備していきたいと聞いている。つまり、AW8のように将来的に抽水植物が広がるようなワンドを目指すのか、あるいは水深を確保して水面を優先させるようなワンドを目指すのかを将来像に配慮しながらモニタリング結果で得られた知見を活かすことが望まれる。

→生態系ネットワークの中で先行的な箇所として紹介しましたが、具体的に種を決めているわけではなく、対象となる種によって目指す環境は異なると考えている。ご指摘いただいた点を考慮して、ご助言を頂き進めていきたい。

- ・(委員) NW1とAW4の水深が1年間でかなり小さくなっている。特にNW1では50センチぐらい1年間で小さくなっているが、要因については複数考えられるが、現時点では特定できないと考える。水深が50センチ、1年間で変動している結果についてはかなり大きいと思われるため、NW1だけでもいいので、地形の変化等を、詳細に追いかけていただきたい。

→NW1についてはワンドの開口部が本川の流心方向とほぼ直角をなすような形状も影響しているのではないかと考えている。経年的に見てもかなり小さくなってきている傾向があるので、今後、詳細な地形も含めて調査していく。

- ・(委員) ワンドを造成したならば、その目的が何かをはっきりさせておく必要がある。

→

ワンドの造成は、当初、多自然川づくりという中で、鳥の餌場等を目的として整備したという経緯があった。現在、これらの効果を鳥類調査等で検証している。

- ・(委員) 河川によってはタナゴやイタセンパラ等を増やす目的でワンドを造成する場合もあるので、もっと多様的に目的を考えるべきだと思う。

→ワンドの保全、新たに環境を創出する箇所について、生態系ネットワークの取り組み等の観点を踏まえ、目的を明確にする必要があると考えている。

- ・(委員) 目的を「大型水鳥等に配慮した環境」としたときに、ヒメガマなどの抽水植物の地下茎を掘り出して食べる鳥類もいる。特に、ガン類や天然記念物であるオオヒシクイなどの鳥類は、抽水植物のうちマコモを好むと考えられる。マコモは一般的に淡水性の植物と考えられるが、近年では感潮域でも確認していた。今後生態系ネットワークにも利用できる有益な知見となる可能性があるため、どのあたりまで感潮域なのか教えてほしい。

当然目的を明確にしながらワンドを創出するほうが良いと思うが、少なくとも大型の水鳥類とか何かをイメージすると、今のワンドではスケールが余りにも小さ過ぎるので、今後、ワンドの大型化や多様な環境の創出が求められる。

→神戸堰までが感潮域にあたります

ワンドのスケールや多様な環境の創出については今後検討していきたい。

2. 開削部下流調査結果

- ・資料-2 について、事務局から説明を行い、以下の質疑及び助言がなされた。

- ・(委員) これは1回だけの調査になるのか。藻類が繁茂するような季節の変化があるので、複数回行う事が望ましい。

→今後の調査計画について検討したい。

- ・(委員) 藻類が密に見られるエリアが半分大橋の上下流にあるが、水草はほとんどなかったのか。

→藻類と水草の両方が確認されている。

- ・(委員) ブルーギルの再生産がこの地点で行われているという結論があるが、この範囲でだけ再生産されているとは考えにくい、どこかからか流入してきていることも考えられる。今後、注意しておいてほしい。

→今後、考察を加えていく。

- ・(委員) 人為的に放流されることもあるので、当該地区の遊漁の規制も必要ではないか。

- ・(委員)当該部分ではどの水草が優占しているのか。水草が繁茂すると魚の生息場所としてはよいが、オオカナダモが優占した場合、その場所を発生源とし、分布が広がる可能性もある。また、植生図にはこういった水草の分布は図化されないのか。

→当該地域ではオオカナダモが優占しており、また、水草は図化の対象外となっており、今後扱い方について、相談させていただきたい。

また、この地域では放水路の分流により、水草がフラッシュされている。ただ、pHの上がり方を見ると再生産も早い可能性があり、フラッシュがあった場合、細かく見ていくことも必要になると考えている。

(委員)カゴマットに生えている水草は、地上部が流されても地下部分が残る再生産する可能性がある。それも考慮してほしい。

(委員)オオカナダモが水鳥の餌となっている可能性がある。

- ・(委員)pHが10を超えており、光合成が原因であるとは考えるが、異常に高い値となっている。現地調査の際の測定器の精度も含めて今後留意してほしい。

→留意して調査を実施する。

3. モニタリング調査計画の変更

- ・資料-3について、事務局から説明を行い、来年度計画が承認された。

4. その他報告事項

- ・資料-4、5について、事務局から説明を行い、以下の質疑及び助言がなされた。

- ・(委員)堰の倒伏について稚仔魚の降下調査結果を見ると、倒伏前のほうが多くて倒伏後のほうが少ないと読み取れ、堰の倒伏効果が見えない。この倒伏後に調査に入った18時は倒伏させてどのぐらいの時間経ったものか。感覚的には倒伏直後のほうが、流下仔魚は増えるのではないか。どういう想定で実施したのかわからない。15cm下げても湛水域への影響は、あまり変わらないので時々倒伏する方が良さそうに思える。

→倒伏後8時間後となる。倒伏後調査は島根県水産技術センターが実施しており、今後同じ調査がある際にはより連携を図り調査を行いたい。

- ・(委員)堰の倒伏については来年度以降も実施するのか。

→漁協からの要請があれば協力するつもりではあるが、神戸堰の水は農業用水、防火用水として用いられるため、利水者の協力が必要となる。